

■新しい授業レポートの誕生■

# 「あすの授業」を中心に



佐内 信之 東京・杉並区立方南小学校

さない のぶゆき 1970年生まれ。「授業づくりネットワーク」事務局長。研究サークル「実践レポート研究会（代表・上條明夫）」で10年近く学んだ経験が本稿の原点である。その成果の一端は「私の文章修行」というコラムにまとめた。（本誌1998年4～9月号）。

## ① 伝達可能性と再現可能性

本誌連載の「あすの授業」とは何か？

「あすの授業」書き方マニュアル（本誌一九九四年四月号）を引用する。

- ① 1時間の授業を紹介する。
- ② 指導案ではなく、実践を通したものとす。
- ③ 原則として、オリジナルな授業を取り上げる（先行実践がある場合は、その旨を明記する）。
- ④ 授業の手順をその通りにやれば、誰でも授業が再現できる記述をする（再現可能性）。
- ⑤ 授業の実際が、生きいきと伝わるように記述する（伝達可能性）。

この中で特に重要とされている「伝達可能性」「再現可能性」は、藤岡信勝氏（本誌初代編集代表）が提唱した概念である。

まず、その授業ではどんなことが行なわれたのかが基本的には読者の側に伝達できるようにするという要

件を、授業記録の「伝達可能性」と呼んでおこう。次に、その授業記録をもとにして本質的に同一の指導過程を読者が再現し実施してみることが可能なように授業記録が組織されている場合、その授業記録には「再現可能性」がある、ということにしよう。伝達可能性と再現可能性という二つの概念によって、さまざまな授業記録を評価し、分類することができる。（授業書方式による社会科授業の方法）「教育科学社会科教育」一九七七年三月号）

藤岡氏は「伝達可能性のない授業記録」として「指導案型の授業記録」を取り上げている。さらに「伝達可能性はあるが再現可能性が欠如しているようなタイプの授業記録」の共通点として「教師と子どもの問答形式で進められる」授業を挙げている。「教師が予定していた発言とその場の状況に応じて必要となった発言」の区別が曖昧なため「授業プランの追試、再現を妨げる」と指摘している。

その後、藤岡氏は授業記録の再現可能性を高めるために、次の提案を行った。

教師の発問や説明のうち、授業以前に構想し授業の組み立ての柱になるものと、その場の状況に応じて行なわれたものとの記録のうえで区別することである。その方法は簡単で、授業記録のうち前者の発問や説明を線で囲めばよいだけである。(「授業研究と実践記録の要件」『歴史地理教育』一九八二年二月号)

ほぼ同時期に、向山洋一氏は指示・発問を枠囲みする「法制化スタイル」の指導案づくりを提唱する。研究サークルの仲間と数千枚もの指導案を集めた向山氏は「指導案のほとんどは、再利用する価値がない」と結論づける。ただし、わずかに「参考になる」と考えた指導案には「教師の主な発問」「教師の問いかけ」が「そのままの言葉」で示されていた。「授業の再現は発問・指示・子どもの動きが示されていないとむずかしい」という結論にたどり着いた。(「追試」ができる指導案づくりの提唱」『授業研究』一九八六年二月号)

藤岡氏は「実践記録論」として、向山氏は「指導案論」として、両者とも「授業の

骨格をなす教師の発問や指示を枠(中略)で囲め」という結論に達した。(藤岡信勝「手順の意味を明示しよう」同前誌)

つまり、読者が授業事実を理解する「伝達可能性」と、授業内容を追試する「再現可能性」が確保されているとき、その実践記録は価値が高い。そのために必要なのが発問や指示の枠囲みである。もちろん「あすの授業」にも枠囲みは欠かせない。

## ② 発問中心の授業と活動中心の授業

ところが、二十年近い歴史をもつ「あすの授業」でも、近年、書き方に悩む常連執筆者の声が聞かれるようになってきた。

書くほうも苦しいのです。総合、どう書いたらいいのか、わかりません。使える実践(追試できる)もほとんどありません。かえって、指導案が載っている本の方が役立ちそうなくらいです。(上條晴夫「新しい授業をどう書くか?」本誌二〇〇〇年一月号)

総合のような新しい授業では、ベテランでも実践記録の書き方が分からない。従来

のように指示・発問を枠囲みするだけでは授業の骨格が伝わりにくいのである。この問題については、上條晴夫氏が分類した次の授業モデルが参考になる。

### 発問中心の授業

教師—1つの授業に3つほどの発問をする。

学習者—発問にそって考える。

### 活動中心の授業

教師—最初に活動の枠組み(話題・時間など)を示す。

学習者—その枠組みを最大限にいかし、自分なりの試行錯誤をしながら学習を進める。

(ワークショップ型授業で国語が変わる小学校)『図書文化、三ページより』

「発問中心の授業」では、教師の主な発問を枠囲みすれば授業の骨格が伝わった。しかし、タイプの異なる「活動中心の授業」では、同様の書き方は通用しない。

こうした新しい授業の書き方として、上條氏は「授業の中で働くルールの記述(システムの明示)とその内部で起こった典型

例の記述(エピソードの記述)が必要という結論を出した。「どんなエピソードが必要か?」本誌二〇〇一年七月号)

システムとエピソード、この二つを手がかりに、新しい「あすの授業」の書き方について考えてみる。

### ③ システムを明示しよう

→再現可能性を高めるために

#### (1) 指導の骨格となる指示・発問

「活動中心の授業」が増えているとは言え、従来の「発問中心の授業」が必要ないわけではない。子どもたちが確実に知識・技能を身に付けるためには、指示・発問による指導が求められる。

このように教師のコントロール度が高い授業の場合、指導の骨格となる指示・発問は今まで通り強調しなければならぬ。指導の手順を再現するために、次のような枠組みを用いるのである。

春  
てふてふが一匹韃靼海峡を渡って行った。  
安西冬衛

この詩の中で、対比されている言葉はどれでしょう。

(二杉孝司「向山洋一の授業」春の分析「教育」一九八六年二月号より)

#### (2) 活動の枠組みとなるルール

指示・発問を枠組みする「法則化スタイル」の授業記録を提唱した中心人物は向山洋一氏である。この向山氏の授業論について、上條氏は次のまとめを行っている。

「追試の出来る授業記録」づくりを教育界に普及させた向山洋一氏は「説明中心の授業」がまだ一般的だった授業状況のなかで「発問」を括り出せと大号令をかけた。これは今から考えたと「発問中心の授業」論の提唱であった。(授業記録の新しい波―一九八四年―二〇〇四年―「教育」二〇〇五年二月号)

しかし、新しく始まった生活科や総合など「自ら学び自ら考える」授業に「発問」はそぐわない。そこで、上條氏は「活動中

心の授業」では「活動(ルールのか条書き)」を枠組みして「システム」を明示すべきと主張している。(システムを書く「本誌二〇〇〇年二月号)

以下、「あすの授業」における「活動中心の授業」の枠組みの例である。

① 先生が質問をする。

② いちばん当てはまると思う国のカードの所に移動する。(3分)

③ 友達とおしゃべりしながら移動してよい。

④ 移動終了後、理由をインタビューしていく。

⑤ 質問を変えて②④を繰り返す。  
(中村健一「部屋の四隅―日本と関係の深い国々」本誌二〇〇七年一月号)

このような「活動中心の授業」が広がれば、「今後」ルールのか条書きを枠組みしたものを冒頭にもつ授業記録がだんだん増えていくだろう」と上條氏は指摘している。

(「教育」二〇〇五年二月号)

何を枠組みするか、その選択は「発問」「活動」どちらを中心にした授業の再現可

能性を高めるかという問題である。実践者自身の授業論に直結しているのである。

#### ④ エピソードを記述しよう

～伝達可能性を高めるために～

##### (1) 事実型から説得型へ

新しい授業の書き方のコツは「ルールの記述（システムの明示）」と「典型例の記述（エピソードの記述）」である。なぜ、システムだけでなく、エピソードの記述も必要なのか？

上條氏は言う。

実践全体を単に報告するだけの実践記録では新しい実践の事実を広く伝えていくことはできない。問題意識の明確化が必要である。（説得型レポートの自覚「本誌二〇〇一年四月号」）

「活動中心の授業」は新しい実践である。必ずしも万人に受け入れられているわけではない。だからこそ、上條氏は「エピソードはシステムのよさを論証する構造になっていることが大事」と主張するのである。

（本誌二〇〇一年七月号）

そもそも「あすの授業」は事実を前面に出す「報告型レポート」に近い授業記録であった。しかし、今後「活動中心の授業」を書くならば、事実を支える考えを前面に出す「説得型レポート」も意識しなければならぬ。原稿を読んだ読者が授業事実を理解するだけでなく、「自分もやってみよう！」と思えるように、伝達可能性を高める必要がある。

##### (2) 説明型から描写型へ

では、いかにしてエピソードを記述するか。「説明するな描写せよ」（拙稿、本誌一九九八年四月号）を原則としたい。

例えば、教師の指導・子どもの反応を描写するために「会話」で示す方法がある。前述の中村氏の実践を例に紹介する。

『どうしてサウジアラビアを選んだの？』

「アメリカとか危なそうじゃけん」

「アメリカって危ない国なの？」

「だって、普通の人が銃とか持っているよ」

「そうなんだって。アメリカを選んでる人、どうする？」

教師のインタビュアーにより、サウジアラビアを選んだ子どもの理由が明らかにされていく様子が伝わってくる。

さらに、次の「ふり返りシート」の記述も紹介されている。

・「サウジアラビアが石油でもうけている」と言ったSくんに「なるほど」と思った。

子どもの「作品」が、中村氏の主張「友達のおしゃべりが4つの国に対する見方や考え方を広げてくれる」を支える根拠になっている。授業中の「おしゃべり推奨」システムにより子どもの学びを促したエピソードが、明確に記述されている。

今後、「あすの授業」で「活動中心の授業」を取り上げる場合、子どもの反応を今まで以上に「会話」で示す必要がある。そして、より直接的に子どもの反応を示すには「作品」の引用が効果的である。

伝達可能性を高めるエピソードの記述方法は何か、「会話」「作品」などの描写を意識して考えていきたいものである。